東海古代研究会　令和八年

東海の古代

第 307 号　2026 年 3 月

会長　：　宮澤健二
編集　：　石田泉城　　投稿先アドレス：toukaikodai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

「契丹古伝」とゲノム解析

小牧市　宮澤 健二

はじめに

いわゆる古史古伝の中には、編纂者の伝承が日本人でないものがある。筆者の知る限りでは、「契丹古伝」（耶律羽之）と「宮下文書」（徐福）である。もちろん盲信するわけではないが、興味をそそる伝承である。今回は「契丹古伝」を取り上げてみる。

「契丹古伝」は、陸軍兵站部長・浜名寛祐が朝鮮で入手した「契丹の古記録」を解読し、自身の解釈を含めて『日韓正宗溯源』（1927 年）として発表したものである。それは、①浜名自筆の写本のみで、原本資料が確認されていないこと、②当時の「日鮮同祖論」や「大アジア主義」を正当化する政治的意図が疑われること、③中国の正史『遼史』などとの齟齬や乖離も見られること、などから偽書とされている。

しかし、読みと解釈に異論はあるかもしれないが、原文には、歴史的事実ではないにしても、他の文献にはない伝承的事実が含まれる可能性もあるため、すべてを切り捨てる立場では真実から遠のくことになりかねない。この拙稿では、ゲノム解析という現代的な視点を加えて検討してみたい。

１　「契丹古伝」（浜名説）の概要

佐治芳彦『謎の契丹古伝』（1990 年）を参考に、浜名による解釈をまとめてみた。

(1) 記述形式等

原文は、契丹の大官・耶律羽之（890 ～ 941 年）が撰した史書とされ、９件の古文献を引用する形態をとっている。全文 2980 字の漢字羅列（契丹文字ではない）であるが、契丹語の部分は万葉仮名的な表記になっている。日本の古語や神名、地名を彷彿とさせる語群が含まれるという特徴がある。

（例）第 25 章の書き下し文（最後の 6 字は読めないとしている）

武伯山軍、冀に糾合し、南に跳破するに当たり、たまたま寧羲雖、其の舟師及び弩旅を以て渝浜に会す。高令、国を挙げて前走し、歌って曰く。鄂納番達謨孟。珂讃唅隕鋌孟。伊朔率秦牟黔突。壓娜喃旺嗚孟。

（解釈）浜名による解釈では、ニギシ＝ニニギノミコト、タニハ＝丹波、タマモ＝海舶伴（船師）、カサキ＝笠沙崎、イツモ＝射手伴（弓兵）、イソススミコト＝猿田彦

固有名詞を日本寄りに読んだ上で自分の主張に合致する解釈をしている。このことが、

中国の東北地方の言語や歴史に詳しい浜名の自作自演との説を惹起させている。

後学の研究家は別の解釈で読み解くことが多いが、浜名の説から外れても、全体的な解釈は成り立つことから、浜名による創作説は極論であると考える。「契丹古伝」原文の価値を浜名の解釈の是非とは切り離して論ずることが重要であろう。

(2) 文明の源流は「東大神族（シウカラ）」、日本はその継承者

東アジア文明の源流を「東大神族（シウカラ）」（浜名の命名）という中国東北部から中南部に広がる偉大な民族としており、殷王朝もその一族であり、漢族に中原地域を逐われ、故地で「辰沄殷（しんうんいん）」（中国正史では「箕子朝鮮」）となった。その後、南進した一派が辰国から三韓、日本になり、別の一派は匈奴や契丹などにもなったとする。

浜名は、日本の「高天原」や朝鮮の「檀君神話」、契丹（モンゴル系）の始祖伝説は、すべて同根とし、そのうち最も純粋な血統と文明を継承したのが日本（大和民族）であり、天皇の祖先こそ正統な継承者であるという結論につなげている。

(3) 日本神話は大陸起源

①「日祖」と「天照大神」の同一視

契丹の伝承に登場する「日祖（にっそ）」という存在を、日本神話の天照大神と同一視している。日祖が東の大海で禊を行い、その結果として「日孫」が生まれたという記述があり、伊邪那岐命の禊によって天照大御神が誕生した話と似ている。浜名は、日本神話の太陽信仰は東大神族の共通信仰であったとする。

②三種の神器の原型

日本天皇の象徴である三種の神器に相当する宝物が、東大神族にも存在したと主張している。特に「鏡」を重視し、鏡の本義を説く章が設けられている。契丹の英雄が持つ宝剣や宝玉が、後の草薙剣や八尺瓊勾玉に繋がると解釈される。

③天孫降臨は大陸での出来事

日本神話の天孫降臨で、神々が降り立った高千穂の峰は九州ではなく、大陸の聖地（例えば満州の山々）を指していたが、その記憶が日本に持ち込まれたものだとする。

以上のように、浜名の解釈をもとに「契丹古伝」の概要をみたが、原文の解釈に必然性はなく、牽強付会と思われる解釈を正す研究がなされている。アジアの諸民族に文化人類学的な共通点があるのは事実であり、田中勝也『古代史原論』(2012 年)などで考究されているが、この点は別稿で論ずることにする。

２　日本人ゲノムの分析結果

(1) 金沢大学らのグループによる研究（2021 年）

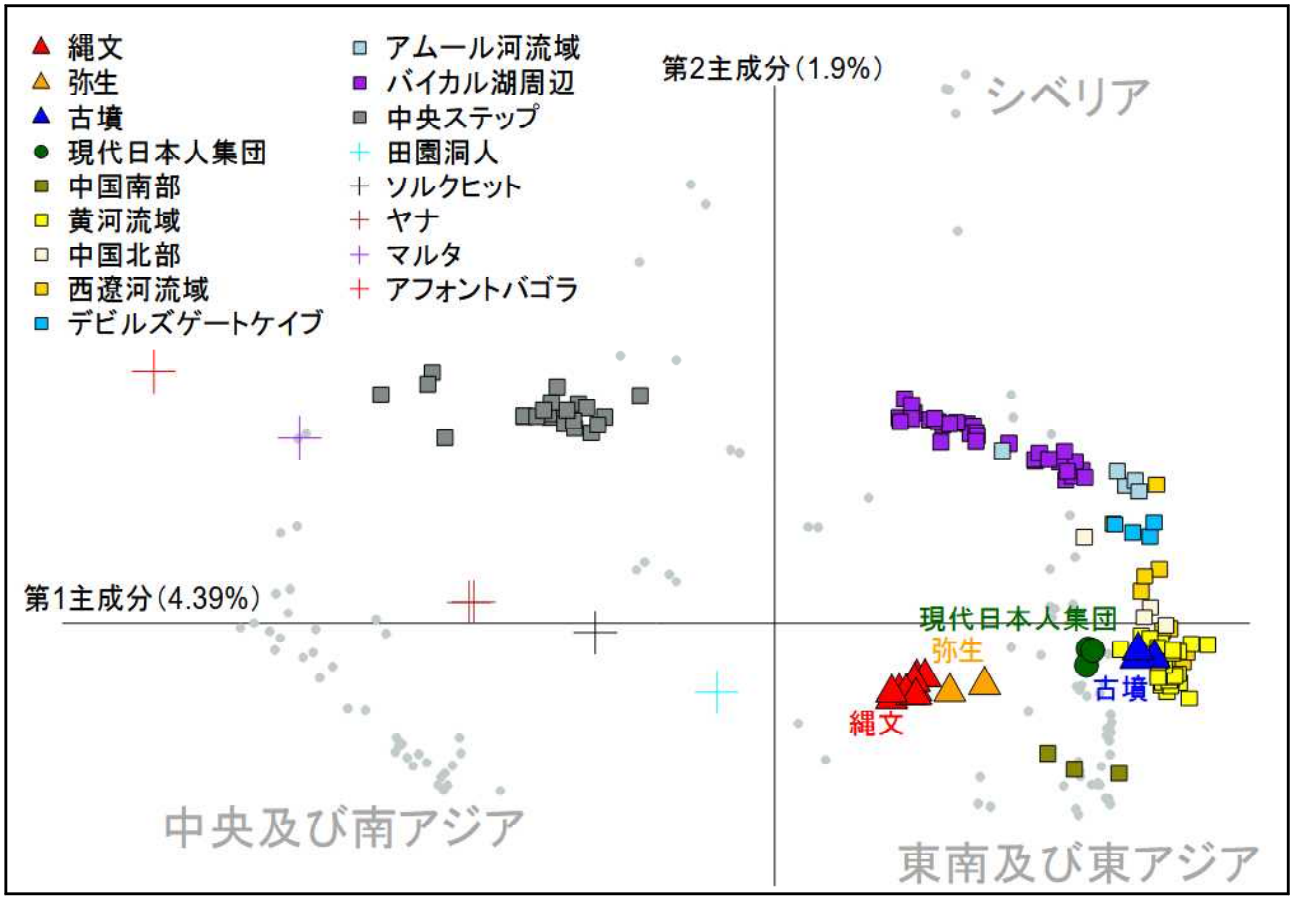
金沢大学を含む研究グループは、パレオゲノミクス（古い生物遺体から生物の全遺伝情報を抽出し，比較解析する研究領域，研究手法）に基づき、日本列島に居住していた縄文人と渡来した弥生人によって日本人が形成されたという従来の説（二重構造説）は、三重構造に見直しが必要であることを発表した。

次の図のように、古墳時代人は黄河流域、中国北部、西遼河流域の人々に近い位置を占めている。これは、移動の過程で各地域に残留した人々もいる中、古墳時代になって最終的に日本列島に移住した人々が、縄文人・弥生人との共生を通じて現代日本人に近づいたと解釈できる。

つまり、縄文時代から現代に至るまでの日本人ゲノムの変遷は、縄文人は独自の祖先成分をもっているのに対し、弥生時代には北東アジアを起源とする集団、さらに古墳時代に

は東アジアの集団が日本列島に渡り混血していったと分析できる。そして，本州における現代日本人の集団を調べてみると，古墳時代に形成された３つの祖先から成る三重構造を維持していることがわかったとしている。

古墳時代には東アジアの集団が日本列島に渡り混血していったと分析できる。そして，本州における現代日本人の集団を調べてみると，古墳時代に形成された３つの祖先から成る三重構造を維持していることがわかったとしている。



(2) 理研のグループによる研究（2024 年）

古人骨全ゲノムのサンプル数を先行研究より大規模にし、現代日本人ゲノム情報に基づいて、この三重構造モデルの裏付けを行った。

縄文の祖先比率については、沖縄が最も高い比率（28.5 %）で、次いで東北（18.9 %）である一方、関西が最も低い（13.4 %）と推定された。これは、縄文人と沖縄の人々の間に高い遺伝的親和性があるとする先行研究と一致している。また、関西地方は漢民族と遺伝的親和性が高いことが明らかになった。

さらに、中国、韓国、日本から報告された古代人ゲノムデータを使って、東北と関西の間の遺伝的親和性の違いを評価したところ、

①関西人と黄河またはその上流地域の古代中国集団（中新石器時代および後新石器時代：仰韶文化（BC5000 年以降)、竜山・良渚文化（BC3000 年以降)）との間に顕著に密接な関係があること

②東北地方の個体は、

・縄文人との遺伝的親和性が顕著に高いこと

・沖縄の宮古島の古代日本人ゲノム（高い縄文比率を持つ）や韓国三国時代（４～５世紀）の古代韓国人とも高い遺伝的親和性を持つこと

が示された。

本研究では日本人の遺伝的構造に対する東北地方人の祖先の影響の重要性が初めて強調され、蝦夷が居住していた地域であることから、その起源を調べる必要があるとしている。

まとめ

理研の研究成果のうち、縄文時代に黄河流域から日本列島（関西地域）に到来した人々の痕跡が現在に至るまで残っていることは意外ともいえる。西日本は縄文人にとって住みやすい環境ではなく、過疎地域であったことが知られているが、むしろ黄河流域からの移住者にとっては住みやすい場所で、そのために根付いたのかもしれない。商業国家の殷は、殷賑と表現されるが、関西人がその賑やかさを受け継いでいるのを面白く感じるのは筆者だけではないだろう。有名だが疎遠な印象のあった黄河文明が身近に感じられる。

金沢大学の研究は、さらに古墳時代に中国からの流入があることを示しており、これは中国が五胡十六国時代で混乱を極めた影響かもしれない。五胡（匈奴・鮮卑・羯（けつ）・氐（てい）・羌（きょう））こそ、まさに東大神族の重要な部分であり、非常につじつまが合うのである。

以上のように、「契丹古伝」の内容は、細部において異論はあろうが、黄河・遼河文明を担った人々の日本列島到着を示唆するゲノム解析の成果と矛盾しない。そのことは「契丹古伝」偽書説の否定証明となるわけでなく、依然としてそれを起点として歴史を語ることはできないものの、頭の片隅に残す価値があることを示している。したがって、今後も「契丹古伝」を多様な角度から検討する必要性を感じている。

継体という勝ち馬に乗った尾張氏

名古屋市　田沢 正晴

１．はじめに

尾張氏の起源は、おそらく成務天皇の時代に初代尾張国造に定められた乎止与命（おとよのみこと）と考えられるが、その勢力が絶頂期を迎えるのは、尾張連草香とその娘、目子媛の時代だろう。

6 世紀に入ると、大阪平野南部の百舌鳥・古市古墳群のような巨大前方後円墳は築造されなくなる。その 6 世紀に限ると大阪府高槻市の今城塚古墳が墳長 190 ｍで一番大きく、二番目は名古屋市熱田区の断夫山古墳で 150 ｍとされる。三番目が筑紫君磐井の墓と推定される福岡県八女市の岩戸山古墳の 135 ｍであるので、このことからも、6 世紀の尾張氏の権勢の大きさを窺い知ることができる。

継体天皇の陵墓を宮内庁は太田茶臼山古墳（大阪府茨木市）に治定しているが、歴史学・考古学では今城塚古墳が継体の真陵とされる。また、断夫山古墳の被葬者は草香もしくはその娘で継体の最初の妃でもある目子媛とするのが有力である。それでは、継体天皇と尾張にはどのような繋がりがあったのだろうか。

２．継体天皇と目子媛

第 26 代継体天皇は記紀によれば、応神天皇５世孫とされるが、両書ともに明確な系譜を示してはいない。即位前の拠点について『日本書紀』は越前国、『古事記』は近江国を治めていたと記す。第 25 代武烈天皇が後嗣を定めないで崩御したため、大伴金村や物部麁鹿火などの推戴を受けて即位したというのが定説になっており、河内国交野郡にあった樟葉宮で即位したあと、山城国筒城宮、弟国宮を経て大和の磐余玉穂宮に遷るまでに相当の期間（20 年とも言われる）を要している。すぐに大和に入らなかったのは、定説とは異なるが、政治力、軍事力、経済力を高めることで大伴氏、物部氏などの大和の官僚機構を掌握する力を蓄えておく必要があったからだろう。

后 妃	系　譜	旧国名・郡名	県・市
手白香皇女	仁賢天皇の皇女	大和国石上広高宮	奈良県天理市
目子媛	**尾張連草香の女**	**尾張**	**愛知県**
稚子媛	三尾角折君の妹*	越前国坂井郡三尾郷*	福井県坂井市*
広媛	坂田大跨王の女	近江国坂田郡	滋賀県米原市
麻績娘子	息長真手王の女	近江国坂田郡	滋賀県米原市
関媛	茨田連小望の女	河内国北東部	大阪府寝屋川市周辺
倭媛	三尾君堅槭の女	近江国高島郡三尾野	滋賀県高島市
和珥美媛	和珥臣河内の女	大和国添上郡	奈良県北部
広媛	根王の女	近江国か	滋賀県か

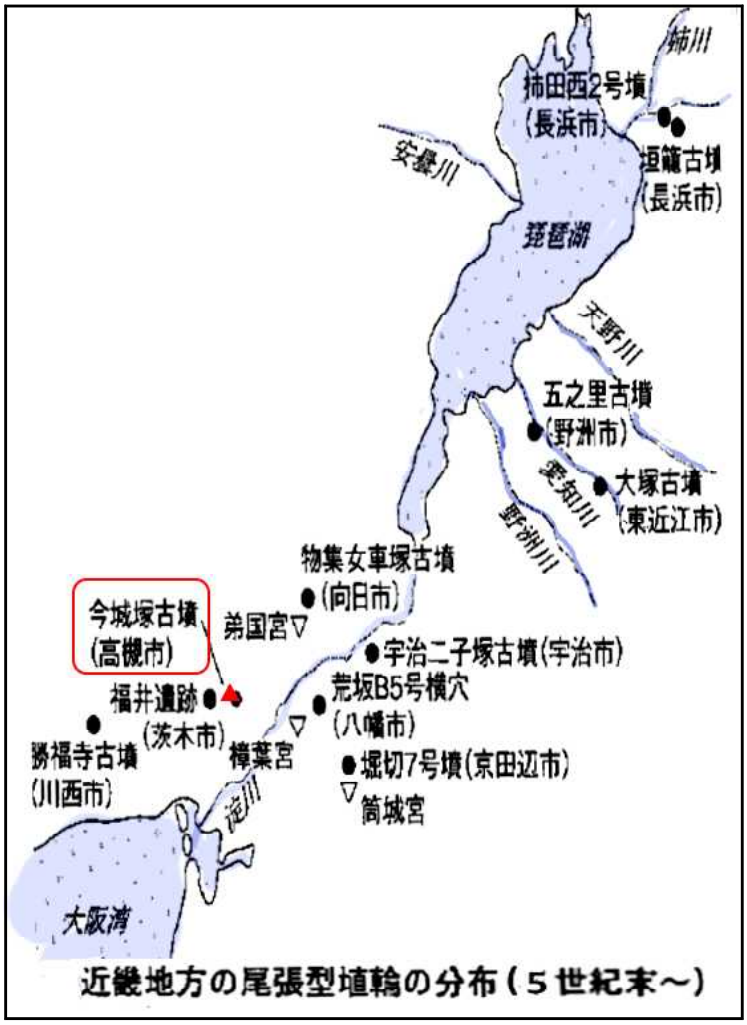
＊三尾を近江国高島郷三尾野と考える定説は取らず、越前国坂井郡水尾郷とする有力説に従った。

継体は上の表に示すような婚姻戦略を用いてこれを実現した。すなわち近江、河内、尾張から妃を娶ることでこれらの地域の有力者を味方につけ、大和を取り囲むようにしてその勢力を伸ばしてきたと考えたい。その戦略の中心部分となるのが、尾張の目子媛だろう。実際、目子媛の子の安閑、宣化は後に天皇に即位していることからも、継体が目子媛を娶ったことの重要性が分かる。

３．尾張型の円筒埴輪

ここまでの考察で、継体は大和包囲の手段として、尾張の目子媛に近づく戦略をとったとの解釈を試みたが、継体が尾張の地に足を踏み入れた形跡はない。ここで、継体が尾張に近寄ったのではなく、逆に目子媛側から継体に秋波を送った可能性を探ってみたい。

尾張の猿投窯では、古墳時代後期になると須恵器の技術を応用した独特の尾張型円筒埴輪が創出される。須恵器は 5 世紀前半に百済、加耶から日本列島に持ち込まれ、河内の陶邑窯跡群、筑紫の牛頚窯跡群、尾張の猿投窯跡群が三大古窯として知られている。尾張の円筒埴輪は、須恵器工人が作ったことに特徴があり、土師器を用いる埴輪工人の作った埴輪との大きな違いは、ロクロを使う点にある。



近畿地方の尾張型埴輪の分布（５世紀末～）

水谷千秋氏（1962 年～・堺女子短期大学副学長）は『継体天皇と朝鮮半島の謎』（文春新書・2013 年）で、「尾張型埴輪の分布が、近江から越前、淀川流域などに展開していることに、複数の考古学者が気づいた。」と述べている。（同書掲載図を参照。色づけ調整）

この分布図で一つ気になるのが、今城塚古墳からは尾張型埴輪が出土していないことである。図では▲になっていたので、本年 1 月 27 日に今城塚古代歴史館を訪ね、内田真雄館長にお尋ねしたところ、「近くの福井遺跡などで尾張型埴輪が出ているが、今城塚からは出ていない。」ことが確認できた。

また、福井県あわら市の横山古墳群では、480 年頃に造られた古墳から、それまでの越前にはない尾張系の埴輪が出土するようになる。（堀大介氏：1973 年～・佛教大学教授。2024 年 3 月 19 日インタビュー談）　横山古墳群は、継体の生母、振媛の生誕地でもある越前高向（坂井市丸岡町）にもほど近い。これらの尾張系埴輪の分布状況は、継体と尾張の善隣友好関係を雄弁に物語っているように見える。すなわち、5 世紀後半の尾張の勢力は越前、近江、山背、摂津方面との間で積極的な交易を行うことにより経済力を蓄えていたことが想定されるのである。

４．尾張氏の祭祀ビジネス

このことから、尾張氏は、尾張型円筒埴輪を祭祀の道具として各地の豪族に供給するような祭祀ビジネスを行っていたとも考えられ、大和への進出を企てる近江の継体と、近畿方面へ販路拡大を図る尾張勢が、近江のどこかで出会っていた可能性は考えられないだろうか。

さらに言えば、そこに、熱田社（熱田神宮）が尾張氏の支援者として存在していたかも知れない。熱田社は尾張国造の乎止与命の娘である宮簀媛が、日本武尊から預かった草薙剣をご神体として祀っている。尾張氏は、平安期まで熱田社の大宮司職を世襲しているので、尾張氏と熱田社は古くから深く繋がっていたのだろう。

そして、この祭祀ビジネスに欠かせないのが重量物である円筒埴輪を運搬するための水運技術である。尾張とその周辺には縄文、弥生時代に北部九州などから渡ってきた海人族が集落を形成するようになる。加藤宏氏「古代尾張氏の足跡と尾張国の式内社」（1988 年刊）によると、その尾張の海人は２派に別れて発達した。一つは清洲町朝日に拠点を持ち、木曽川沿いに中島郡北部の真清田神社あたりに進出した一族である。やがて多氏系の丹羽氏と融合。一宮の全域と中島郡北部を支配する。もう一つは愛智郡に本拠を置いた海人で、名古屋南部から東部丘陵、長久手、山田郡東部あたりに勢力を伸ばす。そして、現在の小牧市大字小針の周辺で先述の海人と連合し小針の地を開拓し尾張氏を名乗るのである。

尾張氏が海人族の流れを汲むことは間違いなさそうだ。しかし、尾張氏に関連する船などの海運関係の考古史料はあまり見つかっていない。丸木船の出土例としては、1838（天保９）年尾張国海東郡諸桑村（現愛西市佐織町）で 20 ｍ前後の古船が発掘されているが年代は明らかでない。

５．継体がヤマトを目指す真の目的

尾張氏が近江方面を目指したのは、猿投窯の円筒埴輪を主体とした祭祀ビジネスを用いて、経済力を高めることが目的だったと考えると理解しやすい。一方、継体は近江周辺の豪族との通婚という手法を使って政治力を強めていった。両者の目的は異なるが、近江、淀川エリアでの思惑が一致し、ウインウインの関係が結ばれた。そこに目子媛の存在があったことは疑いない。

それではなぜ継体がこのタイミングで近江周辺を支配しようとしたのだろうか。そのきっかけとなる重要な時代背景がある。それは、15 代応神天皇からはじまり、仁徳、履中、反正、允恭、安康、雄略と続く河内王朝（応神王朝）の衰退である。大仙陵古墳を始めとする百舌鳥・古市古墳群を築造した河内王朝は、21 代雄略天皇をピークとして 480 年ごろの雄略の崩御後に王朝の衰退期を迎える。というのは、雄略は織田信長にも似た抜群の

政治的センスと軍事的能力を持つ一方、残忍冷酷な側面を持ち、即位前から一族や臣下を次々と粛清している。それもあって、25 代武烈は後継者を残すことが出来なくなる。国内においては、諸豪族の求心力が弱まり、朝鮮半島では新羅が勢力を伸ばして百済や加耶を圧迫してくる。

このような状況下、継体が大和を目指したのは、自身のためと言うよりは日本という国に危機感を持ったのかも知れない。継体は越前や近江の一豪族とは思えないほど朝鮮半島の情勢に精通し、国際感覚に優れていた。百済の武寧王と親しかったことはよく知られている。福井県永平寺町の二本松山古墳からは、朝鮮半島の加耶で多く見られる額飾式と呼ばれる帯冠とよく似たタイプの金銅製冠が出土している。この豪華な王冠を見ると、越前はヤマト王権や筑紫王権と同様に、百済や新羅と交易や人的移動を行っていたと思われる。これを敷衍して、倭の五王はヤマト王権でも筑紫王権でもなく、応神から継体に至る「越前王権」だったと考えると古代史のロマンが膨らむ。

６．尾張と近畿のネットワーク

尾張氏が目子媛と継体との婚姻を通じて、尾張型円筒埴輪を近江、淀川流域に広めていったことを先に述べた。しかし、尾張と近畿のつながりは、３世紀にもその痕跡が見られる。奈良県桜井市の纒向遺跡から出土する外来土器の 20 %は、東海系であるとされる。(石野博信氏 1975 年の 49%を自身が 2019 年 20%に訂正)

また、東海を発祥とする弥生式土器としては、パレススタイル土器（赤彩土器）とともに、Ｓ字甕を思い浮かべる方も多いだろう。甕の口縁の断面形がアルファベットのＳに似ていることからＳ字甕と呼ばれる。２世紀に伊勢湾沿岸部で誕生したＳ字甕は、３世紀になると東海東部、甲信越、北陸、関東、東北南部まで分布し、全国的な広がりを見せるようになる。これを赤塚次郎氏は第１次拡散期とする。その 50 年後の３世紀半ばには、Ｓ字甕の第 2 次拡散期が訪れる。この拡散期は、下図に示すように、分布の方向を西に変え近畿方面への動きとなる。

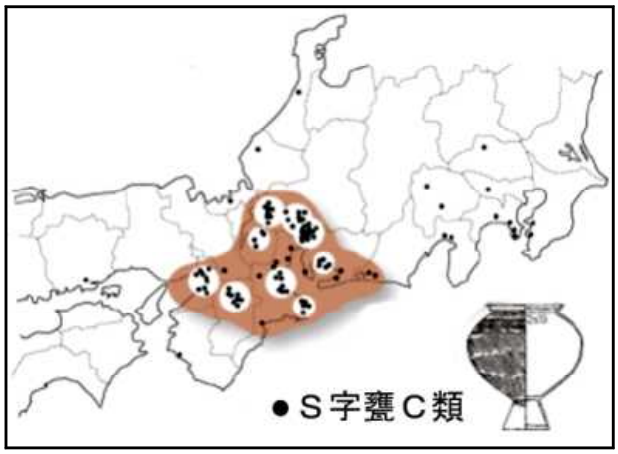
この時期（３世紀半ば）の纒向遺跡からは、運河跡や建物群跡とともに、西は山口県、東は静岡県に及ぶ広範囲の外来系土器が出土しているので、まさに纒向は「大規模物流センター」だったのだろう。このように、纏向を始めとした近畿各地からＳ字甕が出土していることから判断して、３世紀半ばの尾張の支配層もしくは陶工集団は、初期ヤマト王権と親密な関係にあったことが想像される。

７．宇田型甕

ところで、「宇田型甕」をご存じだろうか。Ｓ字甕は０（ゼロ）類からＡ･Ｂ･Ｃ･Ｄ類、そして宇田型甕に大きく６つに分類される。おおむね，０・Ａ類が２世紀，Ｂ・Ｃ類が３世紀，Ｄ類が４世紀で，宇田型甕が５・６世紀前葉を中心として製作された。

Ｓ字甕シリーズの最後に登場する宇田型甕の特徴としては、Ｓ字甕に比べ口縁部は外面の屈曲が消失し、直線的となることなどである。ここで重要となるのは、S 字甕 D 類でいったん伊勢湾岸に限られた分布域が、宇田型甕では登場当初から分布範囲を広げていることだ。その名の由来でもある岐阜市の宇田遺跡を含む美濃、三河、伊勢などのほか、滋賀県長浜市の大塚遺跡、大阪府高槻市の新池古窯からも宇田型甕が出土している。この新池

古窯は今城塚古墳に埴輪を供給した拠点であるので、宇田型甕と継体との繋がりがここでも想定される。尾張型円筒埴輪は今城塚古墳から見つかっていなかったが、宇田型甕との係わりは見られるのだ。
（Ｓ字甕・宇田型甕に関する記述は、「継体大王と尾張の目子媛」1994 年小学館に所蔵の「尾張の土器と埴輪」（赤塚次郎氏）および「Ｓ字甕研究所」サイト記事による）



８．まとめ

尾張特産の須恵器系円筒埴輪や、Ｓ字甕、宇田型甕が、継体の活躍と時期を同じくして近江、淀川流域に展開していることを見てきた。このことと、尾張の熱田台地に忽然と姿を現した巨大な段夫山古墳との因果関係についても考察してきたた。

やはり、尾張氏と継体天皇との繋がりが無ければ、６世紀に築かれた古墳の中で全国二番目となる墳長の古墳は築造出来なかったのは明らかだろう。この古墳の被葬者は、日本武尊妃である宮簀媛との説もあるが、継体という勝ち馬に上手く乗ったことで、尾張氏の黄金時代を築き上げた尾張連草香と考えたい。

『魏志』倭人伝の行路記述は梯儁・張政の記録を纏文したか（2）

吉川市　堀口 啓一

３　伊都国は末盧国の東南か

残っている疑問、それは伊都国の方位である。

伊都国は末盧国の東南と記載されているが、実はこれも梯儁と張政の記録の纏文が原因なのかも知れない。梯儁は一大国から末盧国に上陸し、その後伊都国に進んでいる。しかし張政は一大国から末盧国を飛ばして直接伊都国に向かったものと予想している。これは「2 行路の記述は梯儁・張政の記録を纏文したのか」で述べた通りである。ここでも、梯儁と張政の行路記録をそれぞれ予想しておく。

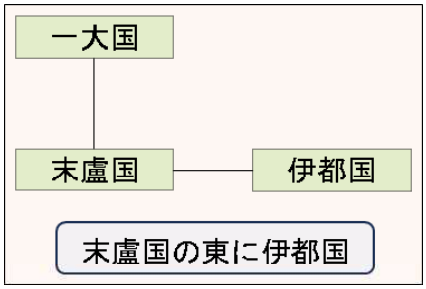
①　梯儁の予想記録

まずは梯儁の予想行路記録である。

- 又南渡一海千餘里 至一大國
- 又渡一海千餘里 至末盧國
- 東(もしくは東北)陸行五百里 到伊都國

梯儁の記録では、末盧国の東あるいは東北に伊都国があると記されていたのでは無かったか。正確な方位は北東であるが、一応方位四分法で言えば北東も東に含めて良さそうなので、東と書かれていたのかも知れない。これを図で表すと右のようになる。これは前掲図 2(第 306 号に掲げている)の一部となっている。

図 4 梯儁の予想行路図



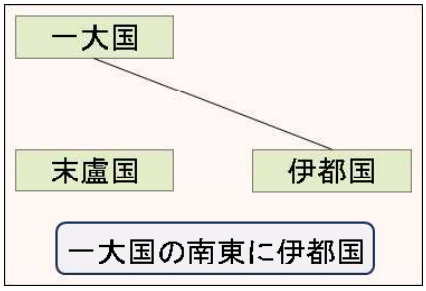
②　張政の予想記録

次は張政の予想行路記録である。

- 東南到伊都國

張政は一大国から直接伊都国に向かったのであろうと考えるが、その方向は南東から東南東の間となっている。方位八分法で言えば南東と見做して良さそうである。つまり**東南**なのだ。これを図で表すと右のようになる。これは前掲図 3(同じく第 306 号)の一部を少し編集したものとなる。

図 5 張政の予想行路図



張政の記録では一大国の東南に伊都国が位置していると記されていたのかも知れず、陳寿は両者の記録を読んだ際に、**末盧国の南東に伊都国があると錯覚してしまった**のかも知れない。あるいは、梯儁の記録に書かれていた末盧国から伊都国への方位である東北を東南の誤記であると思い込んでしまったと言う事も考えられる。一大国から伊都国までの記述についても陳寿の編纂文を挙げておく。

③　陳寿の編纂文

【又南渡一海千餘里　至一大國(梯儁)】
【又渡一海千餘里　至末盧國(梯儁)】
【東南(張政)】【~~十東~~陸行五百里　到伊都國(梯儁)】

投馬国の行路文を挿し込んだ際に[行千四百里](あるいは[千四百里])[自郡至]を削ってしまったかも知れない事態と同様に、ここでも[東]を削ってしまったのかも知れない。恐らくはこのような編纂過程が、末盧国から伊都国への行路が東南と書かれている理由であろうと考えている(この箇所は伝写者による削除では無く陳寿自身が削ったか)。これで、冒頭(第 306 号)で挙げた行路に関する疑問は全て解消される事になる。

4　投馬国は女王国以北なので九州説は成立しないと言う見解

投馬国は女王国よりも北にあるので、九州説は成立しないと説く論者もおられる[*1]。
関連する記述は既出の次の箇所となる。

・**自女王國以北　其戸數,道里可得略載**(『魏志』倭人伝)

九州説では投馬国を宮崎県や鹿児島県に比定する論者が相当数おられるが[*2]、女王国から見て北とは言えなくなる。これを矛盾と見做すようである。しかし、本論攷の立場から見ればこれは矛盾とは言えなくなるように映る。何故ならば、当該記述を残したのは梯儁か張政のどちらかの筈であるが、既述の通り投馬国の行路を記録したのは張政であると思われるからである。そして当該の女王国以北の文章を記したのは梯儁なのであろう。梯儁は投馬国への行路を記しておらず、**女王国以北の国々の中に投馬国が含まれるとは認識していなかった**と言う事だ。今までと同様に、それぞれの行路記録を記す。

【始度一海千餘里　至對海國(梯儁)】
【又南渡一海千餘里　至一大國(梯儁)】
【又渡一海千餘里　至末盧國(梯儁)】
【東南(張政)】【陸行五百里　到伊都國(梯儁)】
【東南至奴國百里(梯儁)】
【東行至不彌國百里(梯儁)】
【南至投馬國水行二十日(張政)】

[*1] 例えば『邪馬台国とヤマト政権』(森田悌、東京堂出版、1998 年)。
[*2] 例えば『邪馬台国』(榎一雄、至文堂、1960 年)。

【南至邪馬壹國(梯儁)】【女王之所都　水行十日陸行一月(張政)】
【自女王國以北　其戸數,道里可得略載(梯儁)】

陳寿は梯儁・張政両人の記録を載録した際に、**投馬国の記述を後から挿し込んだために投馬国が女王国よりも北にあるように読めてしまう**事態を招いているのであろう。このように読解して行けば、従来は矛盾と見做されていた行路記述の疑問も氷解霧消する事になる。

なお、当該箇所には戸数・道里と書かれているが、投馬国に関しては戸数は記録されているが距離は日数値しか記されておらず、里数値は書かれていない。このため、日数値を道里の範疇に含めるべきなのかは充分に考慮を要する事にも思われる。『三国志』において道里の語は『魏志』倭人伝を除くと次の通り『魏志』杜畿伝・『呉志』陸瑁伝・『呉志』華覈伝の三箇所に現れるが、

・所以統一州之民　經營九州之地　其爲艱難譬策羸馬以取道里　豈可不加意愛惜其力哉
(『魏志』任蘇杜鄭倉伝)
・且沓渚去淵道里尚遠　今到其岸　兵勢三分　使彊者進取　次當守船　又次運糧　行人雖多難得悉用
(『呉志』虞陸張駱陸吾朱伝)
・今道里長遠　不可救振　失委附之土　棄貢獻之國
(『呉志』王樓賀韋華伝)

日数値が記されている箇所は一ヶ所も存在しない。もっとも、里数値を伴う記述も見当たらないので判断を下し兼ねる語ではある。語意としては距離や道のりと言ったものとして使われているが、字義としては里数に基づく距離の筈だ。もし陳寿が日数値を含む距離を意識していたのであれば、道里の語を使わずに距離を表す別の語を使用したように思われる。次の事例もある。

・計其道里　當在會稽東治之東
(『魏志』倭人伝)

一応ここでは「道里ヲ計ル」と訓読しておくが、計っているのは帯方郡から女王国までの一万二千里と記述されている里数の筈であり、日数では無い筈だ。陳寿は里数値と日数値を換算出来たのであろうかと言う疑問が湧く事になるが、恐らくは基準となる換算表が無く換算出来なかったのでは無いか。日数値を里数値に換算出来なければ倭国の場所を把握しにくい。里数を考慮しない記述として参考となるのは、次のような記述がある。

・其地大較在會稽東冶之東
(『後漢書』倭伝)

同様に陳寿が里数を意識していなければ、次のようにも記載出来たと言う事だ。

・其地大較當在會稽東治之東

やはり陳寿は道里の語意としては日数値では無く里数値を意識していると見做すのが自然かと思う。となると投馬国は当該文の対象外と見るのが妥当であるように思われる。もし陳寿が投馬国を女王国以北と見做していたのであれば、道里の語を削って次のように戸数とだけ記しても良い筈だ。

・自女王國以北　其戸數~~道里~~可得略載

このように記しておけば、「戸数が書かれている=女王国以北」と読解するのが自然と言う事になる。なお、この論法で言うと狗邪韓国は戸数が記されていないので女王国以北に含まれない事になるが、

・到其北岸狗邪韓國　七千餘里
(『魏志』倭人伝)

その通りで含まれていないのでは無いかとも考えている。狗邪韓国が韓地内における倭の勢力圏であったのかどうかは何とも言えないが、地理面では狗邪韓国は韓地に属するので、陳寿は狗邪韓国は『魏志』韓伝の記述範疇内であると言う認識なのであろう。そのた

め、倭と韓の境界として道里と国名しか記しておらず、戸数は書かれていない。

５　梯儁と張政は面識があったのか

所で、梯儁と張政は面識があったのか？　恐らく両人は同じ帯方郡の官吏であり(帯方郡あるいは楽浪郡の出身か？)、面識があったかも知れない。両者が倭に派遣されるのは僅か七年の違いであり、張政は梯儁の記録を読んだ上で来倭したのであろう。梯儁の記録が洛陽の史局に収められていた場合は帯方郡で実見する事は出来なくなっていたかも知れないが、それならば直接会って倭の事を聞いた可能性は高い。現在においても、外交官にせよ民間商業活動者にせよ国外ヴォランティア活動員にせよ他国に出向く時は前任経験者から知識や経験を引き継ぐものだ。となると、**『魏志』倭人伝の記述は張政の検分**(実際に倭国に出向いて梯儁から知り得た知識と実地情報が合っているかどうかを照合確認する事)**を経て魏朝の史局に残された**ものであり、国名や人名、行路等の記述は正確であった筈である。つまりダブルチェック済と言う事だ。もし**梯儁の記録に記された倭国の名称や行路が不正確であれば、張政が訂正した筈だ。**研究者の中には『魏志』倭人伝の信憑性を貶めようとする者[*1]もおられるようであるが、それは非とすべきであろう。自論に都合が悪い記述があったとしても、史書を誹謗して真実から目を背けてしまうのは研究者の資質を問われ兼ねぬ事であろう。

６　行路記述の疑問は梯儁･張政の記録を纏文した事が原因

『魏志』倭人伝に書かれている女王国への行路記述が前半は里数値で書かれていて終尾は日数値で記されている理由は、陳寿が『魏志』倭人伝を編纂する際に梯儁と張政の記録を纏文したためと思われる。また、末盧国から伊都国に向かう方位が不正確に映るのも、同様の理由によるものと考えられる。この見解により、行路記述に関する疑問は解消されるようである。本論攷により「千載不決之議」が解決するための一助となれば、この上無く幸甚に思う。(完)

国府宮はだか祭りの「神男」と「持衰」

名古屋市　石田 泉城

愛知県の稲沢市にある 尾張大国霊神社(おわりおおくにたまじんじゃ)は、国府宮と呼ばれて地元に親しまれており、この国府宮では毎年「はだか祭り」が行われます。はだか祭りの正式名称は、「儺追神事(なおいしんじ)」といい、称徳天皇が奈良時代の神護景雲元年（767 年）に全国の国分寺で悪疫退散の祈祷を命じたところから始まりました。

天平宝字八年（764 年）には、恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱という大きな内乱が起こり政情が不安定となりました。また、神護景雲元年（767 年)には、大旱魃があって不作になるなど天変地異とともに、疫病の流行が続き、こうした悪疫の厄落としのために行われたのです。国府宮においても国司が祈祷を行ったのが始まりで、1250 年以上の歴史を持つこの神事は、毎年旧暦の正月 13 日に行われる壮大な厄落としの儀式です。数千人の裸男たちがぶつかり合い「神男(しんおとこ)」が祭りの核となります。当初は厄払いの神事でしたが、江戸時代末期頃から祈祷に殺到するようになり厄落としとともに禊(みそぎ)の意味もあります。

[*1] 例えば『国民の歴史』(西尾幹二、産経新聞ニュースサービス、1999 年)。

令和８年は３月１日に行われ裸男らは神男に触れて厄を落とそうと激しくもみ合います。

このように一人を立てて厄を落とす風習は古代にもあります。

『魏志』倭人伝には、次のとおり記されています。

其行来渡海詣中國　恒使一人　不梳頭　不去蟣蝨　衣服垢汚　不食肉　不近婦人　如喪人　名之為持衰　若行者吉善　共顧其生口財物　若有疾病遭暴害　便欲殺之　謂其持衰不勤

その行来(ゆきき)して海を渡り、中国に詣るに、恒に一人をして、頭を梳(くしけず)らず、蟣蝨(きしつ)を去らず、衣服を垢汚(こうお)し、肉を食らはず、婦人に近づかざらしむこと、喪人の如し。これを名づけて持衰(じさい)と為す。もし行者に吉善(よき)あらば、共に、その生口、財物を顧(かえ)す。もし疾病有るか、暴害に遭へば、さらに之を殺さんと欲す。その持衰が勤めずと謂う。

持衰は、倭人の風習で、航海の安全を祈願するために設けられた特別な役割の人物です。

もし、疫病や災難にあえば、不謹慎だと言う理由でこの持衰を殺します。平安無事で何も起こらなければ生口・財物が与えられます。

はだか祭りの神男は、眉毛以外はすべて剃って身体をきれいにする一方で、持衰は汚い格好のまま旅に同行させるというところが真逆です。ただ、厄落としという点では共通であり、古来からそうした風習・思想が日本人には根付いていたと言うことでたいへん興味深いと思います。

ところで、「東海の古代」の過去の論考を読み返すと、再発見があります。

今から９年前の平成 29 年 2 月に発行された 198 号に佐藤章司さんの考察で「韓国内陸行と持衰(じさい)と生口」があり、この中に次の記述があります。

さて、魏使はどこで、この持衰を見たか？と問えば帯方郡から韓国を歴て、韓国内を陸行して倭国の一国でもある狗邪韓国に到着後、倭人の船に乗船した時であろう。珍しさもあって、上のように倭人の使者に問うた。これは、魏使の梯儁が狗邪韓国から倭人の船に乗って来倭したからである。別の角度から見れば、よく言われているように、魏使は帯方郡から倭国まで水行（船）して来たとすれば「持衰」など見る機会はなかったはずだ。韓国内陸路を辿って狗邪韓国に着き、そこから「持衰」のいる倭船に載って来倭した。それを示すものが持衰の記述である。

魏使は韓国内を陸行し狗邪韓国に到着し、ここで持衰のいる倭船に乗船したから持衰の姿や風習を知りえたという新しい視点から、魏使は半島を陸行したことを示唆する考察であり、「歴」は陸行に使用される語句という拙考（「東海の古代」136 号の「邪馬壹國への道筋 その１」）とともに『魏志』倭人伝の朝鮮半島陸行説を補強すると思われます。

＊＊

■ 前回の会報の目次と話題

・尾張国の起源を丹波に探る
名古屋市　田沢正晴

・『魏志』倭人伝の行路記述は梯儁・張政の記録を纏文したか(1)
吉川市　堀口啓一

・一寸千里法について一言
名古屋市　石田泉城

・邇艸と倭人と鬱人　名古屋市　石田泉城

■ 投稿締切り日　３月２６日(木)

送付先　toukaikodai ＠ yahoo.co.jp　石田

■ 例会の予定

１　日時　令和８年**３月１４日(土)１３時半**
２　場所　名古屋市市政資料館 第４会議室
３　次々回以降の予定
4/18、5/9、6/13、7/18、8/15

年会費納入のお願い

１　年 会 費　**5,000 円**(会報誌等送料込み)
２　納入期限　**2026 年 4 月 18 日(例会予定日)**
３　振 込 先　**募集中!**
・金融機関：ゆうちょ銀行
・名称：トウカイコダイケンキュウカイ
・店名：二一八　（店番：２１８）
・口座：記号１２１１０普通１２９９３９５
※ゆうちょダイレクトでは５回/月まで手数料無料